

今年度も「Quality up “研究の中村小”」を合言葉に、校内研修がスタートしました。研究主題である「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくり—各教科等における見方・考え方を働かせて—」に向けて、校内研修の充実と授業力の向上を目指して、研究を進めていきましょう。

特に、「発問の工夫」「目的のある対話」「学びを自覚させる振り返り」等、昨年度の課題を踏まえるとともに効果的なICT活用についても考え進めていきましょう。

「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト実践研究協働校事業

☆前期教材研究会Ⅰ（社会科）☆

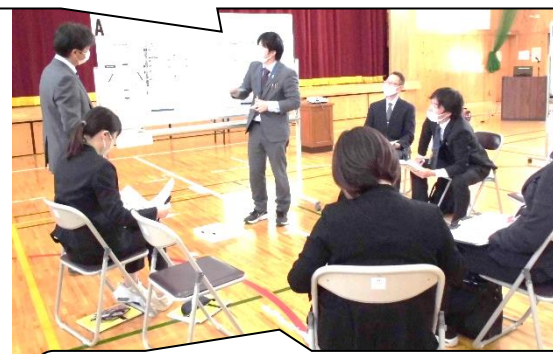
一昨年度より、「高知の授業の未来を創る」推進プロジェクト実践研究協働校事業として3年間にわたって国語科、算数科、体育科、理科、社会科、外国語科の授業研究を進めています。最終年度となる今年度は、前期に社会科、後期に外国語科を予定しており、チームで取り組みます。また、校内授業研究においては、研究教科を国語科及び算数科として引き続き、授業づくりを進めていきます。

4月20日（木）は、社会科の教材研究会を行いました。提案した単元構想を踏まえ、「本単元で育てたい資質・能力は適切であるか」「社会科の見方・考え方を働かせる学習過程及び学習活動となっているか」の2点について研究協議を行い、ご意見をたくさんいただくことができました。また、齊藤一弥先生（島根県立大学教授）の講話では、社会科における育成する資質・能力とは何か、社会科の単元構想をどのように描くかなど、お話を通してたくさんの学びがありました。その学びを先生方と共有しておきたいと思えます。

<研究協議の様子>



生産者、消費者、販売者の立場で多角的に考えていくことはよいが、販売者の立場では考えることは難しいのではないかな。



資料、ゲストティーチャーの活用が重要になるため、どのように活用するのか考えておく必要がある。

導入と単元の最後のつながりはどうか。
・導入が大切であり、今の問いでは、子どもの単元を貫く問いになっていないのではないかな。
・米づくりの課題を提示し、困り感や危機感から子ども達の問いへつなげていくとよいのではないかな。

高知県教育委員会 小中学校課 山崎 理恵 指導主事より

・単元を貫く問い「わたしたちは、どうして一年中おいしい米が食べられるのだろう」にすると生産者側だけでなく、消費者側で考えていく必要感がでてくるのではないかな。
・小学校、中学校のつながりとして、児童生徒が見方・考え方を働かせている姿とはどのような姿なのか、1時間ごとの目指す児童の姿を明確にしておく必要がある。

☆齊藤 一弥先生の講話☆

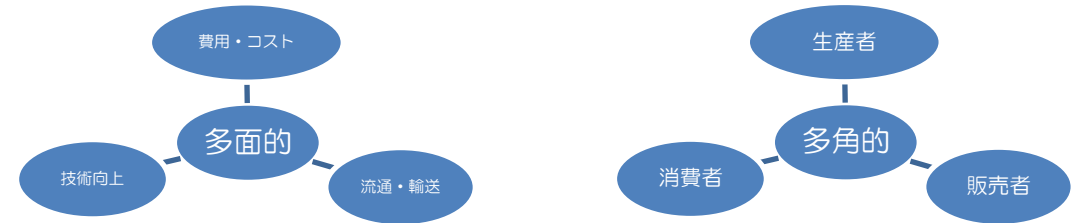
1. Why? 新生社会科の創設理念に学ぶ

新生社会科の創設理念

民主主義における正しい人間関係を理解し、有能な民主的な社会人としての態度・能力・技術を身に付ける。(公民的資質)

☆次代を生きる能力の育成へ

ex. 多面的・多角的な考察・・・米づくりの営みをどのような視点で捉えさせるのが大切。



もし、生産者だったら…販売者だったら…と他者の立場で考えられるか⇒選択・判断・解釈

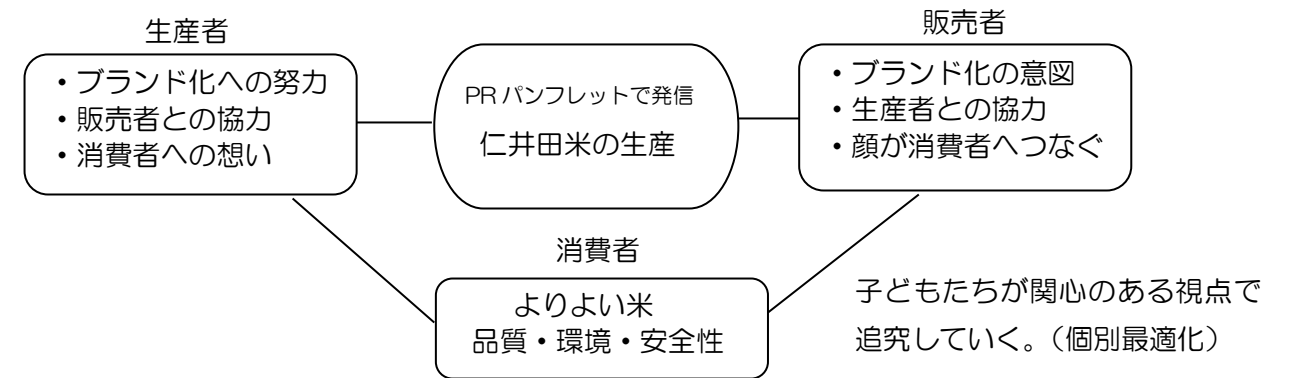
2. What? 米作を通して何を学ぶのか

地理的事実を学ぶのではなく、子どもがそれに関わることでそれを創る次代を創る。

そのためには、子ども達が関わっていく問題解決の質、材との出会いの程度が大切。

ex. 価格—ブランド化

生産に関わる人の生産性や品質の向上の工夫・努力

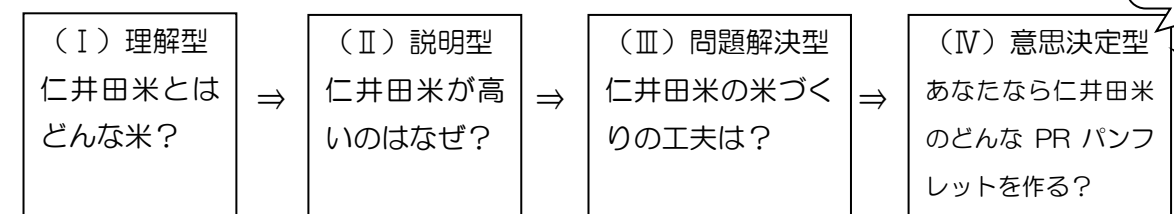


3. How? 社会科らしい文脈をいかに描くか

問題解決が必然・切実で、社会への関わり方を選択する力(意思決定)につながる文脈を描く。



<戦後の問題解決のプロセスの変容>



批判的思考

多様化・流動化
価値観の多様化

解不在・容認

今回の教材研究会での研究協議や齊藤先生の講話からの学びをもとに、6月22日（木）の授業研究会に向けて、単元構想や授業構想を再度検討していきたいと思えます。